

別紙様式

令和5年度 学校評価自己評価表（最終）

a ミッション		b 評価計画				c 自己評価					d 学校関係者評価			e 改善計画			
ふるさと世羅を誇りに思い、地域の活性化に取り組む生徒の育成		a ビジョン 他者や郷土を大切に、自ら進んで学び、何事にも一生懸命に取り組む生徒の育成				7月 g 達成値			2月 g 達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明			k 二次評価 イ ロ ハ	l コメント	m 改善案
確かな学力の育成 (研究主任)	基礎学力及びコミュニケーション能力を高め、自発的に他者と協働して課題解決を図る生徒の育成	基礎学力(知識・技能)の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 各種学力調査結果の分析に基づく学力向上に取り組む。 各教科の目標達成のために、1人1台端末を効果的に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国学力・学習状況調査及び標準学力調査の結果が全国平均を上回る。 「授業でクロムブック等のICT機器を週3回以上使用した」と回答する生徒の割合(R4 24.1%) 	全国平均値以上	80%	標準学力 国1 109.4 国2 107.3 社1 99.7 社2 109.7 数1 97.6 数2 88.8 理1 104.1 理2 100.4 英1 100.9 英2 85.6 95.7%	標準学力 国1 109.4 国2 107.3 社1 99.7 社2 109.7 数1 97.6 数2 88.8 理1 104.1 理2 100.4 英1 100.9 英2 85.6 119.6%	B	<ul style="list-style-type: none"> 1月末に標準学力調査を行ったが、結果はまだ出ていない。全国学力の結果から、基礎的な学力を身に付けることが必要不可欠である。 ICT機器の活用についての肯定的評価は目標値を達成している。日常的にICT機器を使用している教科が増えた。 	5	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力の向上のためには、個々に応じた学習指導も必要である。また、全体授業での最適化も重要だと思う。それにより分かる授業となり、分かる喜びを感じ、深く学びたいという意欲につながってほしい。 ICT機器を良く活用している。今後も効果的な活用により、生徒の学力を高めてほしい。 数学の課題が大きい。分析に基づき、授業力の向上に努めてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な学力を身に付けることが必要である。特に支援者に対して、個別最適化された学習環境の整備を進めていきたい。 現在、ICT機器の活用はできない。各教科での実践事例を共有し、さらなるICT機器の使用により、特に思考力・判断力・表現力を育成するのに、効果的な方法を開発する。 				
			<ul style="list-style-type: none"> 汎用的な資質能力である「自発性」と「コミュニケーション能力」の育成を目指し探究的な学習に取り組む。 かかわり合う場としてペア活動やグループ活動の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自発性・コミュニケーション能力」に係るアンケート項目に肯定的に回答する生徒の割合(R4 92.8%) 「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と肯定的に回答する教職員の割合及び生徒の割合(R4 生徒100%、教職員全国86.2%) 	90%	94.3%	94.8%	105.3%	B	<ul style="list-style-type: none"> 2学期の生徒アンケート「自発性・コミュニケーション能力」に係るアンケートにおける肯定的評価の割合が94.8%であった。 「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」という項目における生徒の肯定的評価の割合が94.1%であった。両値とも1学期の達成値を上回る結果となった。教員が目指す生徒像を明確にし、単元構想を工夫したり、適切な評価を行ったりしたことによるものだと考える。 	5	<ul style="list-style-type: none"> グループでの話し合いにより、対話的な学びが行われ、コミュニケーション能力が高まる。また、各教科に応じた「見方・考え方」を相互に関連付け、深い学びの実現や自己肯定感の高まりにつなげてほしい。 グループでの話し合いでは、少人数でよく話ができている。 探究的な学びの成果が出ている。引き続き、各教科にも取組を広げてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も総合的な学習の時間だけではなく、各教科でも探究的な学習のサイクルを意識した授業改善が必要である。 教員が現状で満足することなく、さらなる生徒の成長を期待した見取りを継続して行う。 引き続き、他者との関わり合いに苦手意識を持っている生徒に対して、自分の意見を出し易いように個別支援やグループ・ペア等の意図的な編成を行っていく。 				
豊かな心の育成 (教務主任)	豊かな人間性と自他の良さを認めあえる生徒の育成	生徒の自己肯定感を高め、自信をもたせることで、不登校問題の解決を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 小中連携を密にし、小・中学校をつなぐ活動を通して義務教育9年間で一貫した指導を徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校生徒数を前年度より縮減する。 「自分には良いところがある」と肯定的に回答する生徒の割合(R4 93.1%) 	50%	94.4%	77.2%	81.8%	B	<ul style="list-style-type: none"> 不登校生徒数は、昨年度17名であったのに対し、今年度は1月末現在では11名である。達成値をクリアすることはできなかったが、昨年よりも不登校生徒数を減らすことができた。 2学期の生徒アンケート「自分には良いところがある」と肯定的に回答する生徒の割合は89.7%であった。特に2年生は82.5%と前回より、14.7%下げた。これは、せらゆめTWで実社会での体験活動により、自己認識が調整されたためだと考える。他方、3年生は入試の自己表現に向けて「自分のいいところ」を探したこと、肯定的な回答が96.9%と前回より21.9%上がった。 	5	<ul style="list-style-type: none"> 小学生から中学生になる節目は、子供たちにとって環境の変化もあり、心身ともにデリケートな時期である。小中連携によりスムーズに中学校生活が送れることが大切である。不登校等生徒には、居場所づくりやコーディネーター等による相談体制が整備され、自分自身のいいところが見つかるよう取り組んでほしい。 生徒の生活学習アンケートの「学校に行くのは楽しい」に対する回答で、2年生が1回目より2回目下がっているのが気になる。 中学校区の大きな課題である。次年度よりSS Tを実施し、成果を出してほしい。 自分に良いところがあると可能性を認識する力も付けてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の「居場所作り」を継続して行う。登校しやすい環境づくりを続けるため、教育相談コーディネーターを核とした、教職員間、SC、SSW、高野塾、関係機関等との連携を今後も続ける。 3年生のように、自分のいいところを探す取組を継続して行う。また、教員は生徒を肯定的に捉え、良いところを具体的に褒める取組も継続する。 				
		<ul style="list-style-type: none"> 町主催、地域主催の行事に生徒が積極的に参加し、役割を担う。 町主催の、作品募集に対して各教科から応募を推奨する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「今住んでいる地域の行事などに参加した。また、参加しようとしている」と肯定的に回答する生徒の割合 「世羅町主催事業(郡書展・郡美展・ふるさと絵画等)への作品応募をした。また、しようとしている」と肯定的に回答する生徒の割合 	80%	79.2%	76.3%	95.4%	B	<ul style="list-style-type: none"> 12月の生徒アンケートで両項目とも目標値に届かなかった。日頃行っている、総合的な学習の時間の活動が地域貢献になっていることや、授業中に制作した作品が、地域行事への参加になっていることを日頃から、生徒へ周知していく必要がある。 一方で、総合的な学習の時間を通して、「地域のためにできることは何か。」真剣に考えている様子がみられ、実践していこうとする姿がみられる。 	5	<ul style="list-style-type: none"> 子供は地域の宝である。地域の人は、地域行事を通じた子供たちとの交流を楽しみにしている。子供たちも地域の人の役に立ちたいと思っていて、その機会が増えることで、子供たちはより成長できると思う。 もっと地域からも動きかけをしなればいけないと思う。 総合的な学習の時間の取組が地域貢献につながり、地域を大切にできる心育が育っている。 自分の得意な領域を認識し、チャレンジしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 日頃行っている、総合的な学習の時間の活動が地域貢献になっていることや、授業中に制作した作品が、地域への参加になっていることを日頃から、生徒へ周知していく。 地域への作品応募を継続して行う。また、地域貢献の意義、大切さも適宜伝えていく必要がある。 					
子供と向き合う (教頭)	働き方改革を推進することで、「子供と向き合う時間」と「教師の時間」の確保を行い、職員が健康で高いモチベーションをもって勤務できるようにする。	業務の見直しを行い、超過勤務時間を減らす。また、教職員のタイムマネジメント力を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 毎週1回、定時退校日を設け、年間の授業時数の配分を工夫したり、業務の縮小を図ったりすることにより、定時に退校できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎週の定時退校日の定時退校を実施できた教職員の割合(R4 51.3%) 時間外在校時間の合計が、月80時間未満の職員の割合 	70%	36.2%	54.9%	78.4%	C	<ul style="list-style-type: none"> 「毎週の定時退校日の定時退校を実施できた教職員の割合」は54.9%であった。 また、「時間外在校時間の合計が、月80時間未満の職員の割合」は96.6%であった。4月2人、7月1人、9月1人、10月2人が月80時間を超えている状況がある。 定時退校日の実施率は中間報告(7月)に比べ、18.7P増加した。1週間の見直しを持った業務の遂行について理解が図られたことによる結果と捉えられる。 	5	<ul style="list-style-type: none"> 教職員の心身が健康であってこそ、生徒への最適な教育ができると思われる。これまでの慣習、慣例等にとらわれず、行事の見直し等により、働き方改革を進めてください。 定期的に熟議を行い、課題を改善してほしい。 次は「45時間未満」を目標にしてチャレンジしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> 中間報告の結果を受けて、昨年度確認されている「教職員の在職等時間の縮減について」の内容を、改めて全教職員で共通認識を図った。できる範囲での実行とはいえ、概ね行動化されている。引き続き、意識改革を行うとともに、行動レベルでもできる取り組みを実施し、教職員の働き方改革に対する意識を高めていく。 				
			<ul style="list-style-type: none"> 時間外在校時間の合計が、月80時間未満の職員の割合 	70%	95.8%	96.6%	138.0%	A		5							

【自己評価 評価】
A: 100 ≤ (目標達成)
C: 60 ≤ (もう少し) < 80

B: 80 ≤ (ほぼ達成) < 100
D: (できていない) < 60

【学校関係者評価】 イ: 自己評価は適正である。
ロ: 自己評価は適正でない。 ハ: わからない。

世羅町立甲山中学校